

台湾調査から

——寺廟の神々——

植松明石

在であるような意味を、この寺廟が台湾の漢人社会でもつといえるようだ。今回は台湾、特に台北市内の二、三の寺廟についていくらかの紹介をすることにした。

龍山寺

一九七六年に台湾漢人社会の調査機会にめぐまれたが、七八年以後は毎年渡台し、主として北部農村の社会生活や宗教についての理解につとめている。台湾の国民の構成は大きく原住民である山地民と、大陸華南から渡来した漢人による。最も早く台湾に渡り開拓をすすめ町造りをしたのは福建系出身の人々であった。これよりおかれて広東系の人々が開拓に加わるのであるが、これらの漢人は文化的には殆んど抵抗をうけず、彼等の習慣にもとづく町造りをしたと思われる。この福建系、広東系の人々はそれぞれ独自の中国方言を話す人々であるが、これがいわゆる本省人といわれる人々である。第二次大戦終了により日政時代はおわり今度ばかりは大陸から国民党の人々がやってきて政権の座についたが、彼らは外省人といわれている。現在彼らの話す北京語が、学校教育における共通語となっている状況である。

大陸をふくむ広大な中国は地域的特色が強く、中国全体について言えるものはなかなかないが、そうした中で寺廟は数少い最大公約数のひとつであろうといわれている。台湾の各地を歩いてみると、至るところに寺廟があり、人々が熱心に拝々しているのを見る。日本の神社やその他種々の小祠が、宗教的世界の中核的存

台湾における漢人の足跡の最も古いといわれる町は、一に府(台南)、二に鹿(鹿港)、三に艋舺(台北、萬華)といわれているが、何れも台湾西岸の町で、漢人が台湾西海岸を南から次第に北上し町造りをしたことを示している。艋舺は台北市の龍山区の萬華地域で、現在は台北の中枢部からはずれているが、台北に府城が建設される以前から河港町として栄えたところである。古い町並みには寺廟も多く、台北三大廟といわれる清水巖、保安宮、龍山寺は何れもこの地区にあり、またこの周辺は寺廟に関連する独特な職人の町で様々の店が軒をつらねている。龍山寺は艋舺開拓の折、大陸の福建省晉江県安治郷の龍山寺より分霊し建廟されたもので観音仏祖を主神としている。台湾移住に際して守護神を奉持し(神仏像や分香)やがて寺廟を建立するというケースが多くこのため祭神は大陸で古くから信仰されているものであったり、彼

らの出身の地域的守護神であつたりすること多い。観音仏祖は、大陸一般での信仰も非常に古くからあり、漢人の神々の世界の中心の地位の高い、そして人氣の高い女神で、農村家庭の祭壇でも必ずといってよいほど中央（中央が一番地位が高い。次がむかつて右、そして左である）にまつられている神だ。龍山寺の建築は立派な四合院形式であるが、中央にある主殿の中央に莊嚴華麗なこの観音仏祖が鎮座している。人々の信仰が非常にあつく常に香客でごつたがえし、日本人の観光客も必ずおとすれる名所である。観音仏祖の他にこの主殿には三接引仏、釈迦如来、韋馱天、護法尊天、文殊菩薩、普賢菩薩、十八羅漢など主として従祀とされる仏像の他に、固有名詞のつかない土着的な山神、土地神、四海龍王がまつられている。さらにこの主殿の後方にある後殿には金箔美麗な女神、天上聖母（媽祖）を中心に太陰公、太陰娘、水仙王、城隍爺、註生娘々、地頭夫人、朱夫人、大壯夫人、土地神、婆祖母、文昌帝君、朱衣神、金甲神、大魁星君、紫陽夫子、閔聖帝君、三官大帝、地藏菩薩など仏教、道教その他様々に所属する神像が配置されているのを見る。これら神々の中には、人氣がなく特に拝まれている形跡のないものもあるが、大多数はその神々のもつ異なる機能に応じて熱心におがまれており、また拝々の様式もかわらないのである。またいわれるように中国王朝の官僚組織の投影としての神界組織が、そのまま祭壇上に表現されているわけでもない。一般に台湾の寺廟がきわめて多神的であるといわれているのだが、観音仏祖を主神とする龍山寺も現在こうした神々の状況にある。龍山寺の年中行事をみると、観音仏祖の誕生日や成道、入滅の日の祭があるばかりか、それ以外の、たとえば天上聖母

（媽祖）、土地神、文昌帝君、三官大帝などともとは仏教に属さない神々の誕生日を寺の祭祀として執行しているのである。龍山寺のこのような実態は、他の殆どどの寺廟の実態を示すのであり、これよりもっと多種、多数の神像をまつるところも多く、人々の多様な祈願の要求にこたえられるようになってい

金安宮

萬華の古い商店街の裏、二階から洗濯物がひるがえるようなせまい裏町の露路の一角にある金安宮は、古い創立の廟であるが非常に小さい。敷地は七坪位というが古びた建物はその半分位の広さだろう。王爺をまつるこの廟には近くの商売の女たちも拝々にくるといふことだ。奥の正面祭壇には金王爺、白王爺、吳王爺、梁王爺がまつられ、むかつて右手すみには王爺の配偶として金夫人、李夫人がまつられている。人間世界の投影として考えられている神々の世界では、神々も妻をもつ必要があり、信心深い人々は男神に對し妻なる神像を与えてまつり、さらにその間にもうけられるはずの子まで想定してまつることがあるといふことだ。金安宮の祭壇にはその他高佬爺、劉備、関公、張飛、文武王爺、矮仔爺など雑多な神々や、王爺の配下として奇怪は首人形の五路兵馬もおかれている。王爺は不思議な神である。池、朱、李などすべて人間の姓をもち、その種類は一三二あるといわれている。多くは非業の死をとげた進士や功臣でいわば日本の御霊神のような存在である。その上御霊神と同様に疫病神としての性格をもち、かつて大陸の海岸地方では疫病流行の折は、その祈願として王爺船を放流した。疫病を遠く海のむこうに放出するのである。一方その

船が漂着したところは、神々の来訪であるとして廟をつくらねばならないとされた。台湾の海岸諸地域にはこの伝承によって建てられたとする廟も多く、まさしく現実の訪れ神であった。また王爺は疫病神の性格のみでなく、最高神玉皇上帝（天公）の配下として人の善悪の監視するともいわれている。童乩との関係も深いとされることから王爺の神霊は活動的であり、また人々とのむすびつきもたたく漢人の小伝統に属する神々といえよう。このような童乩とのむすびつきの有無により大伝統の寺廟と、小伝統の寺廟に分けて考える試みもある。台湾の寺廟の祭神として最もまつられることの多い神である。

聖公媽廟

延平区にある聖公媽廟をたずねた時は夕暮で迷路のようにいりくんだ露路奥のこの廟の看板には赤や青のイルミネーションがかがやっていた。金安宮よりさらに小さいこの廟のお堂は間口が一間半位で、供物台をもうける場所がなく道路上に石製の台がおかれていた。せまい堂内には二、三人の香客が熱心に拝々していたが、それ以上もう入ることはむずかしい程である。祭壇には天上聖母、郭聖王、大藏爺、三官大帝、土地公（福德正神）、弥勒菩薩、観音、その他名称不明の神像がならべられているが、最も興味をひくのは祭壇の下に無縁の骨を取めるとされる大きな骨ガメがおかれていることであった。むかって右男骨、つまり聖公、むかって左女骨、つまり聖媽であり、かつて墓場であったこの地の無縁の骨をまつたのがこの廟であるという。台湾では枯骨がしばしば廟神として祭られる。（これは沖繩でもみられることだ。）

有応公とか義民爺とかいわれる神々がそれで、王爺とちがってこれには姓はない。全く無縁の骨である。聖公媽廟はこの地域一帯の信仰をあつめているばかりか他地域からも拝々にくる。正月からは信者によって神に芝居がささげられるという事で例年、一月から三ヶ月間も続くという事であった。一人で数回分の費用を拠金したり、一回分を数人で分担したり、その方法はさまざまであるがその熱心さは只々おどろくばかりである。戯台は臨時の小屋がけで、最近芝居だけでなく映画もやるようになり、道路の看板にその節目がでていた。この廟は会館事務所もついていたが、その費用も信者の拠金を長年積立てたものを基金としている。寺廟の建立によって財をなそうとする場合もあるが、多くはその献金が個人のふところをこやしことなく廟の公益事業のためにつかわれるとされる。神と人々との間の供物や献金を介してのギブ・アンド・テイクの精神は非常によく守られているのだ。

台湾の寺廟のはんの一端（それも都市の）をのべたが、先づ第一に興味深いのはどの寺廟に行ってもおびただしい人々が熱心に供物や線香を捧げて拝々していることだ。それも老人だけではない。若い男女も多い。祭日にぶつかればその雰囲気は最高潮となる。祭壇に近づくと危険さを感じる人の流れ、目もあけられぬ程堂内にたちこめる紫の線香の煙、そしてこれが日本とはちがうところだが——供物台にとりせましとおかれた三牲・五牲（豚肉、内臓、羽ぬき丸ごと姿をととのえた鶏や鴨、玉子、魚など）の中の三種あるいは五種の組みあわせの供物）、時には丸ごとの豚、果物、菓子その他様々の供物の壮観さ、神々の紙幣Ⅱ金紙を

焼く、金炉の高い煙突から天空に吹き出す猛烈な焰、そして鳴り続ける爆竹、そしてうず高く散乱する爆竹のから。神々が供物を食べたことを占ってから再び供物を籠に入れ戻す手ぎわのよき、供物はすべて持ち帰るのであり、その場では直会されない。廟の広場の戯台で演ぜられる神への芝居、多くの坐売りや屋台店、弾き語り等々、人、音、色、臭い、強烈な人々の信心がふき出るばかりだ。総本山とみなされるような寺廟では遠方各地から数十人、数万人の参詣団が組織され、バスを連ねてくりこみ、分神像を輿にのせ里帰りさせるのである。これら寺廟の経営は拝観料によることなくすべて信者の献金による。学校の寄附は集まらないが廟への金はたちまち集るといわれ、今も寺廟はさかんに新築され、改築、増築もそこで進められている。

一般に古いものより新しいものをよしとするので寺廟の新築、改築には次々と新しい様式、装飾が加えられ、金銀丹青の華麗さや、過剰なばかりに装飾された雰囲気は、日本人が神社に求めたがる枯淡とは全く異なるものだ。

龍山寺やその他の寺廟で、多種多数の神像が存在することを紹介したが、台湾文献委員会の「台湾寺廟一覽表」によると、一九六〇年に寺廟が四二二〇ヶ所あり、その主神のみを対象しても神々は二四七種を数へ、その中寺廟を二〇所以上もつものは二九種あるとされている。寺廟にはこれら主神の外、前にふれたように様々の神が祀られ、また貸出し用の神仏像も多数用意されるから寺廟の祭壇は極めて複雑な状況を呈することになる。寺も廟も建築の様式は相異がなく、仏像のみか神々も「像」で表現されており、仏像、神像を同一祭壇上に祀ることは忌避されない。拝々の

様式もほぼ共通であり、人々はその祈願の内容によってそれぞれふさわして対象を拝々しているのである。

このように寺廟を仏教の寺、道教の廟などと分類することは困難であり、実際これらを拝々している人々の側からすればそのような分類は大した意味を持たないのである。純粋に何々教の寺、廟といわれるものは数えるほどしかないだろうとされている。

これら神々の由来の中で最も多いのが人霊によるものである。個有名詞をもつ歴史上の英雄、忠臣、有徳、賢者らによる神々、王爺のように姓のみもつもの、姓名不明の有徳公の類、そして漢人社会にとって最も重要な、そしてここではふれられないが家庭内の祭壇上に寺廟の神々と共にまつられ拝々されている祖先（姓名が明確）は宗教的对象として除外できないものだ。

漢人社会の宗教的对象の分類は種々試みられているが、そのひとつに神、鬼、祖先の三種を考える分類がある。死者霊が正当な祭祀資格者（父系の男性子孫）の存在によってなることの出来る「祖先」、それを持たず冥界をさまよう「鬼」（特に子孫をもたぬ未婚の女性や異常死者）、そして「神」の三種であるとされるわけだ。その神の多くの部分がまた人霊に由来する神々なのである。

日本人のカミ観念の考察において、祖霊信仰が非常に重要とされ、カミとヒトは同一延長線上にあることが種々論じられてきた。台湾の寺廟を中心にしてきた漢人社会の神々の世界も人霊に極めて依存し、神、鬼、祖先は様々に相互転換が可能である。両者の比較は意味深いことと思われる。そして民間信仰として個々の項目をとりあげて考える方法の他に、ひとつのまとまりのあるコンプレックスをなす宗教的世界としての認識のもとに種々説明し

ようとする必要があるのではないかと考えている。

最近刊行された沢田瑞穂氏の『中国の民間信仰』の中に「蟠桃宮の神々」という論文がある。一九四二年春における北京にあったこの廟の神々の解説を試みたものだが、そこに示された状況は現在の台湾の状況に非常に似ている。さらにこの論文には人民共和國成立後のこの廟の消息にもふれているが、それによると民国三八年（一九四九）の春、最後の蟠桃宮廟会がおこなわれたが三日間に一人の香客もなかったこと、それからさらに一五年後の昭和三九年（一九六四）に訪中団の一人が蟠桃宮の存在は確認した

が、その軒先に洗濯物がかけてあり、信仰上の機能を失っているらしいということも報じている。大陸において寺廟の改廃、民居が最大公約数ではあり得ないのかもしれないが、台湾の寺廟をめぐる日々の活気をしのぶと、この台湾地域に対して、一層多方面の興味をいだく次第である。

（一九八一年度の台湾調査は高橋産業経済研究財団の研究助成によることを記し謝意を表したい）

（専任・民俗学）